

Lesson 5 We Are Part of Nature

1. 写真家・岩合光昭さん
2. ガラパゴスについて



1. 写真家・岩合光昭さん

1. 経歴

動物写真家、岩合光昭さんは、1950年11月27日、東京で生まれた。父は日本の動物写真家の草分け的存在である岩合徳光^{とくみつ}。

少年期から写真に親しんでいた岩合さんが動物写真家を志したのは、1970年、法政大学経済学部在学中の19歳のときに、父の助手としてガラパゴス諸島を訪れたことがきっかけであった。岩合さんはこの時の経験について、「ガラパゴスで心を動かされたのは、珍しい生き物がいるということではなく、ごく当たり前のようにイグアナがいるという環境があることに感動したからだ」と、自然の驚異に圧倒されたことを述べている。

岩合さんは卒業後、動物写真家としての道を歩み始め、南極、北極圏など世界各地を取材、1978年には最初の写真集『LOVE CAT LOVE 愛するねこたち』（講談社）を発刊する。1987年、27歳のとき、雑誌アサヒグラフ（朝日新聞社）に世界中の海をテーマにした『海からの手紙』の連載を始めたことが、動物写真家として認められる契機となった。この企画では40か国を回り、2年3か月に及ぶ長期連載となり、連載中に木村伊兵衛写真賞を受賞した。

1982～84年にはアフリカ、タンザニアのセレンゲティ国立公園に妻、娘とともに1年半滞在して、野生動物の撮影をした。写真集『おきて』は全世界で20万部を超えるベストセラーとなった。1986～1988年には一家でオーストラリアに居を移し、野生動物を取材、撮影をするなど、その後もあらゆる地域の野生動物や大自然を撮影し続けている。

『おきて』の表紙のライオンの親子の写真は、日本人写真家として初めてナショナルジオグラフィックの表紙（1986年5月号）を飾る。さらに1996年の『スノーモンキー』と、日本人で初めて2度にわたってナショナルジオグラフィックの表紙を飾った岩合さんは、海外での評価も高い。独特の色とコントラストを持つ作品はIWAGO'S COLORと賞賛され、海外のメディアでも数多く特集されている。

ナショナルジオグラフィック

ナショナルジオグラフィックパートナーズ社の月刊誌。1888年、アメリカの非営利団体「ナショナルジオグラフィック協会」の公式雑誌として発行されたが、2015年、21世紀フォックス社に売却され、ナショナルジオグラフィックパートナーズの刊行物となった。表紙の黄色の枠を特徴とし、世界180か国以上で840万人に購読されている。写真の選定については厳格で、最高品質の記録写真を掲載してきたことでも知られる。多くのカメラマンが撮影してきた写真も、誌面に載るのは1万枚のうち1、2枚だという。

野生動物や大自然を撮影する一方で、身近な動物であるイヌやネコも撮影し続けており、数多くのファンを獲得している。2012年から開始したNHK-BSプレミアムのドキュメンタリー番組『岩合光昭の世界ネコ歩き』は、ネコブームをけん引し、岩合さんの知名度も大きく上がることとなった。2019年には映画『ねことじいちゃん』で初の映画監督にも挑戦している。

現在も、岩合さんは世界中で精力的に取材をし続け、人間に飼われるイヌやネコと、野生動物の両方を視野に入れた活動を行っている。地

地球上の生き物すべての命を脅かす地球環境の急激な変化と影響を自身の目で見つめ、さまざまなメディアで伝え続けている。

2. 岩合さんの自然の見かた

動物写真家として自然と対峙してきた岩合さんの自然観は一貫している。自然と人間との関係は、人間の側の解釈で捻じ曲げるのではなく、自然の側から「見る」ことである。

写真家としての最初のターニングポイントとなった『海からの手紙』では、海洋生物学者レイチェル・カーソンの『われらをめぐる海』（1965年）を読んで感銘を受け、ここに描かれたものを写真をとって表現したいと考えた。海をめぐる旅で見つけたことは、「世界にはこれほど海岸線があるのに、ヒトの手の加わらない、野生動物の自然な姿が見られる場所は本当に少ない」ことだと語っている。「生き物は本来、自然のバランスが整っているところでしか生きていけません。動物は自ら環境を変えられないから、自分が環境に適応するしかない。ヒトはそのことを肝に銘じねばならないと思います」（『大自然100』小学館）

セレンゲティ国立公園

1981年に世界自然遺産として登録された。セレンゲティとはマサイの言葉で「果



てしなく広がる平原」を意味する。その名の通りキリマンジャロの裾野に広がる広大なサバンナで、面積1万4,763 km²の国立公園内には、約300万頭の哺乳類が生息している。150万頭ものヌーの大群の大移動が最大の見ものとなっている。

タンザニアのセレンゲティ国立公園に家族で移り住んで野生動物を撮影した経験では、

岩合さんは「ありのままに動物を見る」ことの大切さを強く意識したという。セレンゲティの生活の成果である写真集『おきて』には、「その土地の自然や動物を、行きずりの旅行者にすぎない視点から、はたしてどれだけ把握できるものだろうか」と疑問を持ったと記されている。ヒトの頭で考えるのではなく自然と向き合い「見る」こと、人間の都合で見るのではなく、自然、動物の側から人間を見ることが重要だと述べているが、これは人間も自然の一部にすぎないという考えの現れである。

3. 「世界ネコ歩き」とネコの撮影について

『岩合光昭の世界ネコ歩き』は2012年8月6日～8日に、NHKの特別番組として3夜連続で放送され、2013年よりBSプレミアムでレギュラー化された。以後、ネコの目線で世界の街角のネコを撮影し、新作が月1回放送されている。

2015年には番組中に撮影され写真で構成された写真集『岩合光昭の世界ネコ歩き』（クレヴィス、2015年）が発刊され、続編も作られている。また、番組のDVD・Blu-Rayも制作されている。

2017年には『劇場版 岩合光昭の世界ネコ歩き コトラ家族と世界のいいコたち』として映画化された。

岩合さんの写真には、多くの「ネコ写真」に見られるような、愛らしさを人間の側から強調したような写真がない。ネコの視点から人を見たいし、人が見えるとネコを通して街が見えてくるという岩合さんの写真のほとんどには、ネコたちだけでなく、その背後に広がる生活環境が的確に写し込まれている。

岩合さんは「ネコが幸せになれば、人が幸せになれる」とよく言う。ネコの視点になれば、人間の生活環境が本来どうあるべきか、つまり「自然に則した生活環境を大事にする」ということに行きつく。これは人間の中にある動物の

部分を意識すること、動物としてのルーツに戻って人とネコの在り方を見ようとする岩合さんの姿勢であり、ありのままに自然や動物を見ることに通じる。

4. その他の主な作品

岩合さんの写真集をはじめとする主な作品
を年代を追って紹介する。

●写真集

・『北極』（講談社、1978年、岩合徳光との共著）

・『海からの手紙』(朝日新聞社、1981年)*
『アサヒグラフ』連載の初期の代表作をまとめた写真集。

・『海ちゃん ある猫の物語』(講談社、1984年、妻・岩合日出子との共著)*自身の飼った猫の生涯を写真と文で追った作品。

・『セレンゲティ アフリカの動物王国』(朝日新聞社、1984年)

・『おきて』（小学館、1989年）

・『Australia オーストラリアの動物』（朝日新聞社、1989年）

・『カンガルー時間』(小学館 1992 年)

・『スノーモンキー』（新潮社、1996年）

＊表紙カバーに使われた雪玉を持った子ザルの写真が、日本人として初めて、2度めの『ナショナルジオグラフィック』の表紙を飾る。

・『パンタナール』（クレヴィス、2020年）＊南
米大陸中央部の熱帯湿地へ、3年半で5回にわた
り取材に訪れ撮影。

●映像

・NHKハイビジョン放送

*2003 年夏～2004 年春、中国を取材。2004 年秋～2005 年に NHK BS 放送及び総合波で、野生のジャイアントパンダ、キンシコウ、トキなど最新映像の番組を放映。

●Web サイト

<https://www.olympus.co.jp/company/iwago/>

●エッセイ

・『ネコを撮る』（朝日新聞出版、2007年）

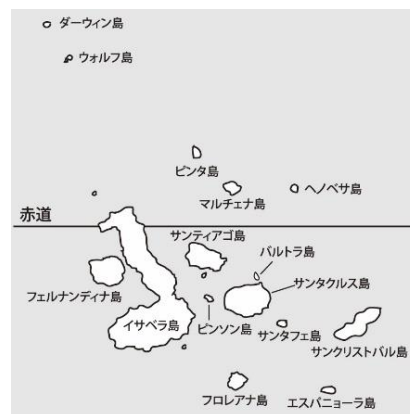
*ネコの撮影指南書。

・『〈ヴィジュアル版〉野生動物カメラマン』
(集英社、2015年)*撮影の裏話、動物の生態、
動物への思いをつづっている。「人間が優位に立っ
て動物を見るのではなく、シンプルに『相手を知り
たい』という気持ちで動物たちと対峙したい」と語
っている。

●映画

・『ねことじいちゃん』（クロックワークス配給、2019 年）＊ねこまき原作の同名漫画を映画化した作品。

2. ガラパゴスについて



1. 基本情報

ガラパゴス諸島は、正式名称はコロン諸島（スペイン語: Archipiélago de Colón）。17世紀にやってきたスペイン人が、ゾウガメの甲羅が馬の鞍に似ていることから、スペイン語で馬の鞍（galapago）を意味するガラパゴスの名をつけた。東太平洋のほぼ赤道直下の火山群島で、イサベラ島やサンタクルス島などの19の島と、200あまりの小島や岩礁からなる。本土から約1,000キロ離れているが、エクアドルに属す。陸地面積は約7,882km²。約500万年前に火山活動によって形成されたと考えられているが、他の大陸と隔絶されているため、独自の進化を遂げた動植物が数多く生息する。ガラパゴス諸島の有人島は4島であるが、最も栄

えている島がサンタクルス島である。

2. 進化の生きた博物館

ガラパゴス諸島は大陸と陸続きになった歴史をもたないため、在来生物は、飛来したか、海を渡って漂着したものの子孫に限られる。隔絶されて独自の進化を遂げた固有種が多く見られるため、「進化の生きた博物館」と言われ、世界遺産第一号のひとつとなった。ガラパゴス諸島には多くの固有種が存在し、その数は5000～6000にも及ぶ。なかでも爬虫類が代表的でその固有種率はほぼ100%である。ほ乳類も一部アシカを除く90%程度が固有種で、天敵になるような大型の陸生ほ乳類が存在しないのも特徴である。また、鳥類の宝庫としても知られており、ウミドリを除いた約75%が固有種である。

ガラパゴスリクイグアナ

(Galapagos Land Iguana)



□学名 *Conolophus subcristatus*

□全長 100～150cm

□体重 6～13kg

□寿命 60 年以上

□特徴 ガラパゴスのイグアナは、はるか昔に南米大陸から渡ってきた種。大陸の種は絶滅したが、ガラパゴスでは陸のサボテンをえさとするこの種とサンタフェリクイグアナ、そして海藻を主食とするウミイグアナへと進化した。リクイグアナは、肉や皮が珍重されたため生息数は少ない。また、置き去りにされて野生化したヤギや豚によって巣の卵が襲われ、絶滅した島もある。

ガラパゴスアシカ (Giant Tortoise)

□学名 *Zalophus wollebaeki*

□全長 230cm (オス) 170cm (メス)

□体重 250kg (オス) 120kg (メス)



□特徴 大きなオスを中心としたハーレムを作る。生息地は広く、ガラパゴス全域の海岸でよく見られる。1年に1頭を出産し、授乳期間が時には1年にも及ぶ。

ガラパゴスアオアシカツオドリ

(Galapagos Blue-footed Booby)

□学名 *Sula nebouxii excisa*

□全長 70 ～ 90cm



□翼開長 100
～ 140cm

□特徴 コバルトブルーの足と足を高く上げる求愛の

ダンスで知られる。ガラパゴスにはアカアシカツオドリ、ナスカカツオドリと3種のカツオドリの固有種が見られる。

◆参考文献・資料

【参考文献】

- 『ユリイカ 03』(青土社, 2003 年)
- 『岩合光昭の大自然 100』(中央公論社, 2006 年)
- 『生きもののおきて』(筑摩書房, 2010 年)

【参考資料】

<https://www.olympus.co.jp/company/iwago/>

【写真提供】

Getty Images